



UNU-IAS / Kumamoto University
The Second Joint Workshop
on Finding Future Visions of our World:
A Sustainable Japan and the World
Dialogue Methodology for Social Change
for A Sustainable Future

持続可能な未来に向けた社会変革の対話技法

6-8 May, 2015; at UNU-IAS, Japan; <http://www.ias.unu.edu>

日本語による抄録集

(原発災害後の対話の取り組みの箇所を抜粋)

2-1. プレゼンテーション・タイトル

[東日本大震災後のプロセスワークを土台とした対話の実践報告]

名前：中森 真子

所属：かすかだりの会

職位：運営メンバー（名誉村民）

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

私は福島県の会津地方にある名峰・磐梯山の北部に位置する国立公園・裏磐梯というに住んでいます。2009 年末に持続可能な暮らしの実践をめざし関東より移住しました。食料やエネルギーの自給、地域コミュニティの絆づくりをはじめたばかりの 2011 年に東日本大震災が起こり、私の住む場所も放射能による被害を受けました。生きる土台が崩されてしまい、どうしたらいいか途方に暮れる中、少しでも前に進むため、それぞれが何を思い、考えているかを分かち合う対話の会を 2011 年 5 月に開催しました。それから月 1 回行いましたが、毎回、放射能問題が壁となり、前向きになれないことにもどかしさや絶望を感じていたところ、葛藤解決に取り組む友人よりプロセスワークを土台とした対話開催の提案を受けました。そして、2011 年に裏磐梯の地域づくりのために 3 回、福島県内の人たち向けの対話合宿を 2 回開催しました。感じているモヤモヤして言葉にできないことを言語化したり、抑圧していた怒りや悲しみを表現して良い場合は、復興に前のめりになり、置き去りになる心の癒しとなりました。そして、自分たちの感情が整理され、起きていることを客観視することが出来たり、異なる立場の人の気持ちや状況を理解する助けになりました。

その後、対話合宿のレポートを見た飯舘村の友人から、自分の村でも対話をやりたいという相談を受け、かすかだりの会（旧・までいな対話の会）の準備がはじまりました。ファシリテーターの友人は関東在住、飯舘村の友人は北海道に避難していたため、スカイプ会議を 2012 年に入ってから定期的に行い、2012 年の 7 月に実際に会った対話の場となりました。かすかだりの会は飯舘村の 30 代村民が中心となり、そこに関東からファシリテーター 2 名、東京、宮城、福島からのサポートメンバー 5 名ではじまりました。

プロセスワークを土台とした対話では、その場で起きる、すべてのことを受け止める場です。しかし、本当にすべてのことを受け止める「対話の器」を作るのには、とても長い時間がかかりました。「小さな声やネガティブな感情の抑圧」や「役割の固定化」により、なんども器が壊れそうにもなりました。外からの「対話ばかりやって何になる」という声に押しつぶされそうになることもありました。それを乗り越え、器がしっかりとできた後に、2014 年 3 月にオープンフォーラムという形で世代を超えた村民同士の対話の実現し一つのフェイズが終了したように思います。この 3 年間で得られたものは、自分の中から湧いてくる感情に気づき、その表現のしかたや扱い方、他者への伝え方を学んだことや、異なる立ち位置の人のことも尊重できる在り方に個々に変容したことが成果だと思っています。会としての表だった成果ではありませんが、困難な中、個々が自分の人生を歩む中にそれは生きていると思います。そして、それは、飯舘村の参加者のみならず、運営サポートをさせてもらっている私にとっても 3.11 以降の世界を歩むうえで大きな体験でした。また、そこには役割を越え、存在そのものとして福島に関わってくれたファシリテーターの二人の力がとても大きかったと思います。ボランティアで関わり続けてくれているファシリテーターの二人にこの場をお借りして、感謝の気持ちを表したいと思います。

しかし、この会がめざす、1 人一人の心の復興とコミュニティの再生には、まだまだ遠い道のりです。そこに対して、どのように取り組んでいくべきかは、ただいま模索中です。

2-5. プレゼンテーション・タイトル

[震災復興祈念館・エンターテイメントを通じてうまれる対話
—新しい形で震災後の福島の学びを広く伝えるために]

名前：佐藤健太

所属：NPO 法人 ふくしま新文化創造委員会

職位：代表理事

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

この発表では、私たちが行っている活動を通じてどのような対話が福島内外に生まれることを期待し、また生まれてきているのかについてお話いたします。とくに、私が代表理事をつとめる「NPO 法人 ふくしま新文化創造委員会」で行っている活動を中心に、紹介させていただきます。震災復興祈念館・エンターテイメント・対話・伝えるなどをキーワードに考えていきます。

また、今「NPO 法人 ふくしま新文化創造委員会」として行っている活動以外にも、私がこれまでかかわってきた福島での、あるいは、福島からの対話とコミュニケーションの活動のいくつかについてお話いたします。

1. ふくしま新文化創造委員会とは？

ビジョンと目標とすること、設立時期、メンバーや組織、これまでの歴史と活動内容を紹介します。エンターテインメントを中心としたパフォーマンスにより新たな文化をつくっていき、震災後の福島の学びを広く伝えてゆく活動をしています。

2. 活動内容とビジョン、そこから生まれる対話への期待、成果と困難点

- ・ロメオ・パラディッツ
- ・震災復興祈念館
- ・その他

3. これらの活動の中に取り入れている対話

私たちは活動の中で、プランニングや活動それ自体として、多くの対話技法を取り入れています。どのような対話手法を取り入れ、どのような成果が上がっているかを話します。

4. (ふくしま新文化創造委員会以外の) ふくしまでの・ふくしまからの対話やコミュニケーション

ここでは、過去に行ってきたいくつかの活動（ふくしま会議など）を少し紹介します。

2-3. プレゼンテーション・タイトル
[郡山で取り組んできた対話の場づくりの成果と課題]

名前：三保谷 泰輔	所属：郡山対話の会	職位
-----------	-----------	----

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

1. どんなことをしてきたか これまでの経緯

震災後の2012年7月に、価値観、役割、立場の異なる多様な人たちが集い、オープンに話し合える対話の場を目指してスタート。最初は、限られた参加者だけのクローズドな対話の場から始まる。対話の場の存在を知り、参加したいという他の地域の方からの要望に応える形で、郡山限定から、福島県限定、関心があれば県外からも参加 OK と枠を拡げ、回を重ねてきた。2か月に一回のペースで、これまで14回の対話の場を実施。

2. 成功点、良かったこと

対話の場の名称を、「ひとりひとりの小さな声に耳を傾けるダイアログ」とし、自分自身であったり、他者の内面の深いところにある、聴かれていない小さな声に深く耳を傾けることで、気づいていなかった何かに気づき、小さな変化が起こる瞬間を見出す機会を何度も体験できたこと。

回を重ねる中で、運営メンバー同士が、小さな声に耳を傾け、オープンに対話することで、変化と成長を重ねながら、これまで継続して場を作り続けてこれたこと。

福島県外からの参加者が、福島県在住者の生の声を聴き、福島県在住者が県外の人々の生の声を聴き、多様な立場の参加者が集うことで、互いにネットやメディアの「情報」では分からない、生の声から学びや気づきを得られること。

3. 困難点、課題

これまで誰も経験したことのない、震災後の福島の現状に対して、燃え尽きてしまったり、メンバー間の葛藤や対立で、会の継続が困難になることも起こり得る。そんな中を、自分たちの内面で起こっていることに自覚的でありながら、社会の現状に寄り添い、オープンに心を開き続け、バランスをとっていくことの難しさを感じている

2-4. プレゼンテーション・タイトル

[対話で育てる未来の種]

名前：菅波 香織、霜村 真光、藤城 光	所属：未来会議	職位：事務局長(菅波香織)
---------------------	---------	---------------

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

原発事故後の福島県いわき市で、私はいろいろな悲しい場面に出会いました。放射能を心配する人と、復興に向かいたい人の対立。警戒区域から避難してこられた方と、いわき市民の感情的な対立。いわゆる分断と呼ばれるような場面をいくつも目にし、解決策も見えないまま、日常が過ぎていきました。

ある日、ワールドカフェ形式のワークショップで、原発事故後の放射能問題に向き合う対話の場に参加しました。ワールドカフェとは、カフェの様な気軽な雰囲気の中、自由に話をする形式のワークショップです。

話合いのルールは、2つ。相手の意見が自分と違ってても、議論せず「そういう考え方もあるよね」と答えることと、本音で話すこと。

さまざまな立場の方が参加されていましたが、対立や批判が生じることなく、対話が終わりました。いま、いわきで起きている問題を解決するために、私に何ができるだろう。私の頭の中に、整理しきれない、未来に目を向けた、沢山の考えが湧いてきました。私は、このような対話の場こそ、いまのいわきに必要なのではないかと感じました。そして、私以外にもそう感じた何人かが、いわきで、未来会議を、少なくとも30年以上は継続して開催しようと、立ち上がりました。

未来会議という対話の場を通してわたしたちが実現したいことは、3つです。

1つが、気持ちの分断の解消です。

2つめが、それぞれが抱え、感じている問題の共有・可視化と未来に向けての対話です。

3つめが、未来に向けての実行です。

一つ目は、気持ちの分断の解消。対立や批判でなく、いろいろな価値観があること、一人一人が違うことを認めることが大切だと感じます。そして、それを前提に、共に生きるためにどうしたらいいか、参加者みんなで考えていきます。2つ目については、解決したい問題を共有・可視化し、未来のために、自分たちには出来ることは何かを対話することです。多地域、多ジャンル、多世代の方が参加することで、ネットワーク形成のきっかけともなっています。三つ目は、未来会議では、話し合うだけで終わることなく、一人一人が、未来のためにできることを考え、小さな一歩からでも実行に移していこうとしています。そして、人と人が繋がる場でもある未来会議では、未来をつくる具体的なアクションをめざし、その後のフォローアップまでできる体制を整えているところです。

未来会議には、いわき在住の方、いわきに避難して来られた方はもちろん、震災後の問題に関心のある方は、どなたでも参加できます。

今後30年という長期間、未来会議は、様々な場所で継続し続け、震災後の社会が変わっていく様子を記録していきます。

<http://miraikaigi.org/>

2-8. プレゼンテーション・タイトル

[**【活動報告】** 福島の子どもたちとの長期キャンプにおけるプロセスワーク的アプローチ]

名前：武田 美亜

所属：Shanti Daya

職位：freelance ; ファシリテーター ;
キャリアカウンセラー

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 [活動報告]

要約・概要

三鷹子どもの楽校は任意の市民団体で、2011年から3年間に渡り、福島の子どもたちと2週間に渡る長期保養キャンプを行いました。完全無料の、丁寧な生活とコミュニケーション、関係構築に拘った場づくりです。

子どもたちやキャンプリーダーである学生たちとの接し方に対し、プロセスワーク的な視点やアプローチを導入しました。今回はそのケースの紹介とアプローチの効果などをご報告します。

2つのケースを報告したいと思っています。

ケース 1) 身体感覚チャンネルとムーブメント（動的）チャンネルからのアプローチ

子どもたちとの関係構築において、身体感覚や動きを重視したコミュニケーションスタイルを導入しました。また、身体感覚に意識（気づき）がいくようなコミュニケーション（フレーミング）技法を使うことで、子どもたちが自分の身体との関係性が変容しました。また、ヘルニアによる激痛で苦しんだ中学生とのワークのストーリーもシェアしたいと思います。

ケース 2) ランク概念を活かしたアプローチ

それぞれの立場が持つ「ランク（特権）概念」についての考え方をもとに、リーダーや子どもたちのエンパワーメントを行いました。こちらが「提供者」、子どもたちや福島の人たちが「提供される者」として関係性を位置づけるのではなく、それぞれがその場にコミットして自分のランクを提供していくことで、よりフラットな関係構築につなげました。

2-6. プレゼンテーション・タイトル

[震災における語り部の役割と自己受容]

名前：高村 美春

所属：原発震災を語り継ぐ会

職位：主宰

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

「小さな社会は自分の中にあり、その社会と対峙するための技法が語り部ではないか」

東日本大震災及び福島第一原子力発電所爆発及び避難という体験から語り部として活動してきました。語り部は自分からなろうと動いたわけではありません。はじめは請われて話始めたことがキッカケでした。これまで語り部というイメージは、昔の物語を口伝で伝えるというものがありましたが、実はこの役割は社会的位置ではなく本来家庭の中で年寄がその役割にありました。

しかし現代社会においては核家族となり、その役割が外の社会へと担ったと考えられます。今回の震災でも津波被害を口伝で伝えられてきた方々は、その口伝のおかげで命拾いをしたと揃えて言います。そして、こうした震災は繰り返される悲劇であり未来へのメッセージとして残さなければいけないと認識されるようになりました。

実際には沖縄や広島、長崎、水俣にて多くの犠牲となられた方たちの言葉が心に響き「平和」へと誘われています。

請われて始めた語り部ですが、何度か話を繰り返すなか不思議なことが起こり始めました。まず凝り固まった「恨み」や「怒り」が溶け始めたのです。今なお苦しみが続く中「許す」という境地に立つようになったのです。震災すぐ後にトラウマに襲われました。避難により子供とバラバラになり、少しでも子供と離れると不安になり涙を流すことがたびたびあり、また国や東電に対しても憤怒で言葉にならなかったほどでした。が、現在はそういったものすべてに対して受容している自分がいることに気が付いたのです。それは語り部として話すたびに目の前の人へ語り掛けているだけでなく、自分自身へ問いかけしていたのです。社会とは自分以外に人がいることで社会となります。私は自分の中に様々な「私」がいることに気が付きました。子供と離れて苦しい私、加害者へ恨みつらみを持つ私、そして私とその「私」に聞きます。何が辛いのだと・・・語り部は一つ間違えると不幸のアピールにしかありません。そうではないのです。その被害や不幸から学んだことを伝えることが第一にあるのです。悲しみ苦しみのスパイラルから脱するために語るのだと思います。そしてそれはまた自分自身への受容として生かされるのだと感じました。語り部とは口伝で事実を伝えるだけでなく、苦しみの中にある人が答えを出すためのツールの一つにならないだろうかと考えています。

2-7. プレゼンテーション・タイトル

[なぜ私が告訴をしたのか ―持続可能な未来を求めて―]

名前：武藤類子

所属：福島原発告訴団

職位：団長

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

私は、福島県に住みながら、原発やその危険性について、何も知らず考えずに生きてきた一人の市民でした。そんな私が原発のことでショックを受けたのは、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故が起こったときでした。そのときにはじめて原発事故の恐ろしさについて知り、原発とはほんとうに怖いものだと思い、その後、原発に反対する運動に関わるようになりました。

それから25年、私の暮らす福島で原発事故が起きました。細々ながらも止めようと活動してきたその原発が、しかも自分が住んでいた福島の原発が事故を起こしたという現実を、どうとらえてよいかわかりませんでした。避難のことや生活のことも含めて、どうしてよいかかわらない日が続きました。

告訴を考えるに至ったのは2011年の末のことです。原発事故が起こってしまったこの現実を、まだ受けとめきれずにいましたが、でも同時に、さすがにもう原発はやめようという方向に社会が変わるのではないかと、最後の希望のようなものをつないでいました。でも、その時点で既に再稼働の計画は話し始められ、県や政府の、子どもたちの健康を第一に考えない対応に再度、打ちのめされる気持ちになりました。どうしてこのようなことになるのだろう。そう思って考えたときに、この事故の責任がきちんと問われていないことが、根底にあるのではないかと思うようになりました。

そして仲間たちと告訴団を結成し、団長を引き受けることにもなりましたが、自分の中では、告訴をするということを、自分自身がどのように受け止めていいかわからず、もやもやと悩み続けていました。

人の罪を問うことは、私自身の生き方を問うことでもありました。原発事故は、この社会全体のあり方の結果でもあり、また、原発事故を止められなかった私自身のあり方の結果でもあります。私は、この原発事故を防げなかった自分に、責任と痛みを感じています。にもかかわらず、そんな私が、誰かを訴えてその罪を問うということについて、どのように考えたらよいのだろうととても悩みました。それでも、原発を造ってきた世代の責任として、若者や次の世代の子どもたちに悲しい未来をもたらさないために、社会の制度の中で事故を起こした者の責任を問い、事故の真実を明らかにするために、誰かを訴えるというこの痛みを抱えながら、私は告訴をすること受け入れました。

告訴や刑事裁判と、赦しの関係について、考えることがあります。告訴や刑事裁判は、社会や人同士を対立させ分断するものなのでしょうか。アフリカのルワンダ人の方に、和解についての話を聞く機会がありました。内戦で住民同士が敵味方に別れ、命を奪いあうに至ったルワンダで、戦後、どのように和解や赦しがありえたのか。私が出会った方は、その内戦で家族を複数殺された人でした。でも、その人はわたしの前で「自分の家族を殺した人を赦す」と言い切るのです。ルワンダでは内戦後に刑事裁判を行い、加害者の責任が追及された後で、地域社会での赦しと和解への営みが行われたそうです。裁判を開き、その上で赦す。裁判から始まる対話もあるのかもしれない。そんなことをふと思いました。

事故により分断され、引き裂かれた私たちが再びつながりあうこと、傷つき、絶望の中にある被害者が力と尊厳を取り戻すこと、チェルノブイリなど過去の原発事故の被害者や私たちが経験した悲しみを、二度と子どもたち、若者たちに経験させないために、ひとりひとりが変わることで世界を変えていく。決してバラバラにされず、つながりあうことを力とし、怯むことなく歩んでいきたい、と思っています。

K-1. プレゼンテーション・タイトル

[コミュニティビルディングと若者のエンパワメントと平和のためのバイオエシックス]

名前：ダリル・メイサー

所属：AUSN

職位：プロヴオスト

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 [レビュー]

要約・概要

平和の定義は多様である。このワークショップでは、平和および平和構築に関してその理論的・実践的分析を行っていく。平和構築そして紛争解決については多様な理論があり、更に平和構築や紛争解決という名前は使われていないが、それに類似したコミュニティー活動の例は多く存在している。

2010年より Eubios 倫理研究所は、American University of Sovereign Nations (AUSN)、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）、広島平和文化財団、その他の機関・団体との協力のもと、50の国や地域から600人の若者に対して Youth Peace Ambassador Training Workshops（若者平和大使トレーニングワークショップ）を開催してきた。ワークショップでは、参加者達は協力して平和の文化を促進のための課題発見を行った。これまでのところ、参加した若者たちはそれぞれのコミュニティーにおいて平和の文化を促進するために、250もの行動プロジェクトを開発・展開させてきた。参加者は、あらゆる宗教的バックグラウンドと幅広い関心を持つ層からあり、平和へのマルチ・ディシプリナリー（多分野）的アプローチを提供した。

こうした平和のための能力育成事業に関する近年の開発の一つとして、AUSNにおけるコミュニティーと平和大学院修士証明書プログラムがある。このプログラムの任務は、地域の全てのグループ間の平和的な関係の構築そして災害後の地域再建のために地域団結の促進である。同プログラムは、地球上全ての地域の生活の質的向上に従事している大学院生たちに、大学院レベルに不可欠な教育、知識、スキル、研究機会、社会奉仕機会、創造的・分析的批判思考力、そしてリーダーシップ力などを提供することで、参加者全ての倫理的思考力を育成するように設計されている。同プログラムは、多様な地域に応用可能な異文化間の生命倫理学習とグローバルリーダーシップに従事したい人、倫理的な公共政策とその実践に従事したい人、そして環境保全と地球上全ての人々の公共の福祉に従事したい人にとっての学びの選択肢の一つとしてのプログラムである。

地域、災害復旧、そして平和は、疾病予防・疾病管理、様々な集団内の心身の健康促進と、集団間の健全な関係の促進、そして全ての人々の地域サービスの利用促進など、様々な課題が絡んでくる複雑な分野で本質的に集学的であり、それらに対応すべく同プログラムではプログラム推進に際して、以下のことを重視している：

- ・公衆衛生の公共財および基本的権利としての意識の促進
- ・倫理的意思決定、文化、そして政治思想の多様性の促進
- ・全ての人々に敬意をもって接することと、地域の団結力向上のための異文化理解の促進
- ・優れた研究と真理探究の促進
- ・全ての人と地域の人権・基本的自由・平和・人間としての尊厳と尊重の促進
- ・災害時及び紛争時の全ての人々の人権の促進と保護
- ・世界中の様々なコミュニティー、国民主権国家、そして国連の倫理理念の理解

地球上の先住民たちの文化・伝統・健康・幸福・権利を守ることは急務の課題となっている。紛れもなく、健康と公衆衛生は、持続可能な地域、社会、或は国家の支柱であり、平和にとって明確かつ積極的な役割を担っている。

K-2. プレゼンテーション・タイトル

[効果的な民衆参加を得ることでリスクガバナンスにおいて
地元の知識を取り入れるための障壁と機会]

名前: ジョセ・A・プピン・
デ・オリヴェイラ

組織: 国連大学サステイナビリ
ティ高等研究所

職位: 上席研究フェロー

ご発表は下記のどれに当てはまりますか (しるしをつけてください。複数回答可)

- 1) 対話実践に関する報告 (成功点と困難点含めて)
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況 (分断、対立、葛藤その他) の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

災害多発地域における危機管理戦略は、ハザードの制御用にデザインされた構造的対策と同様に、災害事前準備(備え)・応急対応戦略に重く依拠している。「リスク・ガバナンス」という概念は、危機の社会的次元、特に、意思決定にかかわる社会的相互作用と過程を分析する上でのより広い枠組みを提供する。リスクガバナンスは、人間のシステム内において、危機シナリオと、社会と変化し続ける環境間の相互作用を生み出す主体・プロセス・可変的な相互作用の包括的な理解に焦点を置いている。

リスクガバナンスは、政策実施と目標達成だけでなく政策立案まで扱っているという点、そして、災害時における反応型アプローチだけでなく積極的・率先型アプローチを採用している点において、危機管理の範疇を超えている。より良いリスクガバナンスのためには、的確な技術的・専門的知識と共に、効果的な民衆の参画が不可欠である。

構造的な対策への信頼が民衆の間に浸透する一方、地元の伝統的な知識に基づいた地元伝統型減災戦略はしばしば衰退あるいは軽視されている。専門家が依拠・信頼する専門的・技術的情報と、過去の災害の記録に基づいたリスク知識に関して地元の人々からくる情報—すなわち地元での語り伝え・石版・書き物として残されたものそして地元民の地元環境の熟知など—の間にはギャップがある。計画立案の過程への現地の住民の参加を増やすことによって、より良いガバナンスメカニズムにおけるそのギャップは埋めることができる。

本プレゼンテーションは、日本の東北地方での三重被害後の土地利用計画に焦点を置き、リスクガバナンスの観点から当該地域の動向を理解していく。

東北地方のケースでは、総じて三つの主要なギャップが確認された。

まず第一に、同地域で同じような出来事があつたにもかかわらず、過去の経験から培われてきた地元の知識が今回の土地利用計画に組み込まれていなかったのである。第二に、ある一定地域の土地利用に関する潜在的危険性への警鐘を鳴らす専門的・技術的情報があつたにもかかわらず、土地利用規則の実施に民衆の参加を得られなかった結果、潜在的危険地域の建設は行われてしまったのである。そして最後に、日本は、多くの土地利用計画プロセスにおいては民衆の参加を認めていたにもかかわらず、原子力発電所の立地などいくつかの最も重要な決定事項については地元民衆の参加を受けて入れてこなかったのである。

このように、リスクガバナンスへの地元民衆の参加の強化は、これまで意思決定過程から幾度となく除外されてきた民衆の参加を通して得られる地元の伝統的情報を取り入れることによって、危機管理戦略の改善の重要な道筋となるであろう。

1-14. プレゼンテーション・タイトル

[東日本大震災後の対話ストラテジー—紛争変容・平和構築学の視点から]

名前 石原明子

所属 熊本大学

職位 准教授

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

1. 紛争変容・平和構築の考え方

J・P・レデラックらが提唱した紛争変容 (Conflict Transformation) の考え方では、「紛争(葛藤)がない状態が平和である」と考えるよりは、「紛争(葛藤)こそが、平和への入り口である」と考えている。紛争や葛藤や対立は、その背後に平和でない状態 (J・ガルトウングのいう暴力状態など) があるからこそ(逆に言えば、そこに大切な思いなどがあるからこそ)、そこに紛争や葛藤や対立が生まれるのであり、その意味で紛争や葛藤や対立に耳を傾け、その裏にある問題を見極めて、より平和な状態に変容させていくことこそが本質であると考え。紛争・対立・葛藤を入りにしてこそ、平和を構築できる。

2. 対話とは

紛争変容・平和構築の手段としては、様々な手段がありえるが、対話はその重要な手段とプロセスの一つである。対話とは通常、二者以上の異なった者同士の間で行われるプロセスである。異なった他者同士の間で意味の共有をもとめ、共有された(出会った)と思った瞬間に新しい世界が立ち現れ、また消えていくようなプロセスである。異なった他者同士の紛争において、意味が共有される瞬間は瞬時であっても大切なプロセスである。

3. 震災後に人間関係葛藤がどうして起こるのか

東日本大震災の被災地や被災者の間では、人間関係が葛藤や地域での対立がしばしば起こっており、そのことは、あつれきや分断といった言葉で表現されることもある。なぜ、震災後に人間関係の葛藤が起こりやすいのか。そのメカニズムとしては、いくつかの観点から説明をすることができる(石原 2012, Ishihara2012)

- (1) コミュニティの全体(全員)が傷ついたトラウマ化社会の症状(アウト・アウト・イン)としてのコンフリクトの増加
- (2) 潜在化していた価値観や世界観の違いが浮き彫りになったこと
- (3) 潜在化していた社会格差と構造的暴力の問題
- (4) 現代の法制度や補償制度が引き起こしている分断や軋轢
- (5) ベーシックニーズの基礎となる自然環境が壊されたときの人間の脆弱性

4. 東日本大震災後の葛藤の中で、そこからどのようにして、つながりあい再生していくことができるのか、そのための対話ストラテジー:多様なアプローチを考える

一つには、紛争変容・平和構築のモデルの中でも、傷ついた社会からの変容と再生に関するモデル、トラウマからの回復の戦略と、特にコミュニティの成員同士で傷つけ合いが起こってしまったような場合には修復的正義のモデルが適用できる。しかし、今回の原発事故のような構造的暴力を含む問題においては、それと同時に構造的暴力への気づきと非暴力社会運動が必要となる。

上記の戦略のためにも、対話は大きな役割を果たす。(1)一人ひとりの心のケアに資する対話、(2)コミュニティや家庭で対立したり傷つけあったりした人同士の相互理解や和解、関係変容のための対話、(3)具体的な政策決定や合意形成のための対話などである。それぞれに使われるべき手法は異なるし、また、適用する時期も異なる。また上記の戦略には、いわゆる対話以外に、ストーリーテリング(語り部)、メモライゼーション(記念と祈念)とミュージアム(記念館・祈念館)、アートによる表現、社会運動や裁判なども重要な役割を果たす。しかし、ストーリーテリング、メモライゼーションとミュージアム、アートによる表現、社会運動や裁判もある形式のコミュニケーションであり、それぞれの形での対話がそこに生まれているともいえる。

5. まとめ

今回のワークショップでは、上記の様々な目的に資する対話実践事例(プロセスワーク、ワールドカフェ、円卓会議、合意形成会議)に加え、語り部や震災復興祈念館、裁判や社会運動の取り組みの事例が発表される。東日本大震災後の対話がいかにあるべきか、あることができるのか、豊かな事例から共に未来を探っていきたいと思う。

<参考文献> 1) Akiko Ishihara, et al. (2012) "Peace building through Restorative Dialogue and Consensus Building after the TEPCO Fukushima 1st Nuclear Reactor Disaster", Eubios Journal of Asian and International Bioethics Vol. 22 (3), 2) 石原明子・岩淵泰・広水乃生(2012)「震災対応と復興にかかる紛争解決学からの提言」高橋隆雄編『将来世代学の構築』九州大学出版会、3) 石原明子(2013)「東京電力福島第一原発災害下で起こっている地域や家庭等での人間関係の分断や対立について—水俣病問題との比較と紛争解決学からの一考察」『熊本大学社会文化科学研究』11. pp.1-21

1-17. プレゼンテーション・タイトル

[SATOYAMA イニシアティブと宮城県浦戸諸島における復興の取り組み]

名前：鈴木 渉 | 所属：国連大学サステイナビリティ高等研究所 | 職位：シニア・コーディネーター

ご発表は下記のどれに当てはまりますか（しるしをつけてください。複数回答可）

- 1) 対話実践に関する報告（成功点と困難点含めて）
- 2) 持続可能未来に対話や葛藤変容が必要な状況（分断、対立、葛藤その他）の報告
- 3) 対話と葛藤変容のための手法と戦略についての報告・提言
- 4) その他 []

要約・概要

SATOYAMA イニシアティブは、2010 年に日本で開催された生物多様性条約第 10 回締約国会議（CBD COP10）において、国連大学と環境省が共同で提案し、決議に盛り込まれたもの。COP10 のホスト国である日本や日本が位置するアジア地域においては、古くから人間が自然と共生する生活様式や文化、自然利用が行われてきた。そのような自然と共生する資源利用等のあり方を、条約の実施に組み込むために提案されたのが、SATOYAMA イニシアティブである。このイニシアティブは、原始的な自然を保護することのみならず、日本の里地里山、里海にみられるような、人々が古くから持続可能な形で利用し管理してきた農地や二次林、沿岸環境など、人間活動の影響を受けて形成・維持されている二次的自然環境の保全も同様に重要であるとしている。また、こうした二次的自然環境は、経済発展や社会経済の変化にともなう都市化、地方の急激な人口減少、高齢化などにより日本のみならず、世界の多くの地域でも危機に瀕していることがわかってきた。このような二次的自然環境は、国際的な観点から一定の理解を得ている、社会生態学的生産ランドスケープ・シースケープ（SEPLS）と表現されることが多いが、実際のランドスケープ・シースケープは地域ごとに様々である。

また、国連大学は、これまで積み上げてきた事例等を基礎に、優良事例の収集・分析を一層進める一方、これらの情報を広く共有し SATOYAMA イニシアティブの活動を支援・推進するため、環境省とともに、多様な主体の参加による国際パートナーシップ「SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ（IPSI）」を COP10 期間中に発足させ、その事務局をつとめている。IPSI は、IPSI 戦略、IPSI 行動計画、IPSI 憲章・運営ガイドラインの採択、変更などを経て、メンバー数 167 団体（2015 年 3 月現在）を擁して活発に活動を行っている。

日本三景・松島湾に位置する宮城県塩釜市浦戸諸島は、古くから牡蠣、海苔の養殖や白菜の種、水田など半漁半農の生活が営まれてきました。近年、住民の島離れ、高齢化、後継者不足による島の課題が顕在化する中、2011 年に発生した東日本大震災とその地震により、大きな被害を受けた。

国連大学は、東北大学、インクジェット里帰りプロジェクト、CEPA ジャパンなどの IPSI メンバーとともに、浦戸諸島の復興に取り組んできた。浦戸諸島は、豊かな里山里海に恵まれ、特に牡蠣と海苔の養殖が主たる経済基盤となっている。このプロジェクトは、こうした里山里海の豊かさを生かし、SATOYAMA イニシアティブのコンセプトを取り入れた復興を模索してきた。

復興プロジェクトで課題となったのは、浦戸諸島を構成する有人島 4 島（5 地区）の住民の合意をどのように得るかということであった。4 島 5 地区はそれぞれ独自の文化とコミュニティを持ち、相互の交流はあまりない。一方で、効果的な復興のためには、浦戸全体の総意を形成することが求められた。そのため、国連大学は、ダイアローグイベントとして「浦戸語り場」を 2 回開催するなど、住民の間にある漠然とした不安や期待、要望などを引き出し、それを浦戸諸島全体の総意として、離島振興法に基づく振興計画等に反映することができた。

また、この復興の様子を映像作品にまとめることにより、外部からはわかりにくい島の課題や復興の様子などを国内外に発信することにも取り組んでいる。

